

清海曼荼羅覚書

千 本 英 史

一 はじめに

二 清海曼荼羅の現存諸本

三 清海曼荼羅の「出現」

四 紺地金銀泥という方法

清海曼荼羅は、当麻曼荼羅・智光曼荼羅とならんで南都浄土三曼荼羅の一つに数えられるが、他の二つに比べるとあまり取り上げられないことがないようである。現時点で、室町期以降、江戸期を中心に一〇点の掛幅の存在が報告されているが、このたび所属する大学の附属図書館ホームページから、そのうちの古写二点（仙台成覚寺本および京都聖光寺本）の高精度デジタル画像を公開することができた。これを機としてこの二本の伝来と伝承について報告し、あわせて同曼荼羅が鎌倉期までの資料には姿を現さず、清海の感得伝承が現在の形に固まるのは室町期の聖聡『当麻曼陀羅疏』に下ること、また紺地金銀泥という特色ある画法には、『子島曼荼羅』が周辺で受け入れられていくなど、院政期や鎌倉以降の嗜好の流れの影響が可能性として考えられることについて述べた。

一 はじめに

一般に「浄土三曼茶羅」と呼ばれる、南都に伝わった浄土変相を代表する三曼茶羅のうち、中将姫伝承によって後代広く伝えられた(一)「当麻曼茶羅」と、慶滋保胤の『日本往生極楽記』(九八五年成立)に詳しく由来が描かれ、元興寺極楽房の庶民信仰によって知られた(二)「智光曼茶羅」に対して、(三)「清海曼茶羅」についての研究は非常に少ない。

これまでの研究の主要な成果は、元興寺仏教民俗資料刊行会編『智光曼茶羅』(学術書出版、一九六九)所収の浜田隆氏の「浄土三曼曼茶羅について―清海曼茶羅を中心に」と、元興寺文化財研究所編『日本浄土曼茶羅の研究』(中央公論美術出版、一九八七)の第一章「浄土三曼茶羅の歴史」(岩城隆利氏)の第三節「清海曼茶羅とその流传」および第二章「三曼茶羅の図像的研究」(藤澤隆子氏)の第三節「清海曼茶羅―八世紀浄土図の一つとして」が挙げられる程度に止まっている。

今回、筆者の所属する奈良女子大学の附属図書館ホームページから、この清海曼茶羅の現存本を代表する江戸時代以前書写の二点、すなわち仙台の成覚寺所蔵図と京都の聖光寺所蔵図の高精度の可視光撮影画像および近赤外線撮影

画像を、成覚寺ならびに聖光寺の全面的なご支援を得て公開することができた(「奈良地域関連資料画像データベース」<http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/>)。

成覚寺本 紺色絹本 金銀泥

一五一・一cm×一二八・三cm

聖光寺本 紺色絹本 金銀泥

一八八・八cm×一五六・一cm

成覚寺本の方がひとまわり小振りではあるが、いずれにせよ、縦二m弱、横一・五m前後の大幅の曼茶羅であり、これまではどちらか一方だけでも写真版で全体図像を確認することも困難であったものを、ディスプレイ上で自由に拡大、相互比較ができるようになったことで、図像的な解明にも寄するところが大きいものと自負している。

ここではこれまでの研究を踏まえ関係資料を見直し、また新たに調査しえた資料を検討することで「清海曼茶羅」について基礎的な検討をしておきたい。

二 清海曼茶羅の現存諸本

成覚寺と聖光寺の室町時代書写の二本以外に、現在知られているものに、聖光寺本(別本)、檀王法林寺本、西願寺本(以上京都)、浄土寺本、矢田寺北僧坊本(以上奈良)、心厳寺本、法界寺本(以上千葉)、常福寺本(茨城)

の八本があり、いずれも江戸期以降の制作という（前記『日本浄土曼荼羅の研究』藤澤隆子氏の論文による）。室町の前記二本を含め、いずれも紺色の絹もしくは紙に金銀泥をもって描かれており、これは「当麻曼荼羅」や「智光曼荼羅」がいずれも極彩色で浄土の有り様を描こうとしたのと、大きく違っている。

大きさは、今回公開の二本など縦二m弱、横一・五m程度的大幅のものと、およそその四分の一となる縦一m程度、横〇・六〇・七m程度の小型のものとに二分される。存在の確認できる地方は、京都が四点（聖光寺には室町写〔A〕と江戸写〔B〕の二点が蔵される。今回ホームページで公開した古写の方は現在奈良国立博物館に寄託中である）、奈良が二点あり、あとは千葉（二点）、茨城、仙台と関東・東北にかけて伝存が確認される。

奈良国立博物館に寄託されている聖光寺本には、裏面に天和三年（一六八三）の修理記録が貼り付けられていて、その伝流が伺える（なおこの文の写しが聖光寺に別に伝存する）。

奉修鋪山城国洛陽四條聖光寺 清海曼荼羅之変相

抑此尊像者、人王六十六代帝一条院之御時、和州南都超昇寺清海上人、依志願広大之請、長徳二年（九九六）十月十五日木幡山而権化老翁（相伝云清水観世音

筆）、讒一日一夜間、金胎両部、並今此極樂上品之変相、令図画而授与清海上人畢、因茲雖為彼寺之靈宝、中古依事縁一乘院房官、高間法眼（諱号淳貞）所持之、然間帰依当寺開山良阿上人、無他事自淳貞寄進当寺、誠是日本三曼陀羅第三番而其随一、無双之重宝也
爰筑後国善導寺隱居伝誉樂阿上人、当寺六世住持而表具師宗恩信士与金具屋正善信士、各催啐啄之志、慶長十五年（一六一〇）孟秋十五日令修鋪畢

自爾以来経春秋七十余歳、或損或壊、然間羊僧并寺僧、甚以歎之处、不図当国当所之住人野村新兵衛尉并念誉専山、抽一心丹誠、乞願修鋪於戯羊僧之精誠意趣与施主懇志念願、所熟機縁感応時、仰願変相拝見之徒、莫向境縁生好醜 凝成一念竟無分 忽然打破瑠璃鏡 説法音声許独聞 伏乞修鋪意趣者

法山宗句信士 宗和信士 法雲妙句信女 純寛宗円信女 照月宗雲信士 浄誉寿清信女 春月円松信女 覺林松寿信女 観月松慶信女

帰真 慶雲松甫信女 靈位 帰真 尚澄信士 靈位 松山宗春信士 一之有白信士 明岳唯心信士 妙玄信女 心光宗専信士 妙智信女 花雲證栄信女
願以此功德 平等施一切 同発菩提心 往生安樂国

于時天和三（癸亥）歲（一六八三）七月十七日

洛陽四條聖光寺十六世住持 聖蓮社來誉是三上人慈阿代

取次 当寺西光庵之住僧 広誉英玄大徳

修鋪之施主 野村新兵衛尉 念誉専山信男

表具師 洛陽高倉通坂本町住人 法橋念誉幸善重勝

南無阿弥陀仏

総撰六根惟念仏 浮精煉尽自円成 巍巍台上黄金相

不須起念自分明

来誉是三合掌拝筆（花押）

すなわちこの曼荼羅は、超昇寺の清海上人が、長徳二年（九九六）十月十五日に清水観音から金剛界、胎藏界の両界曼荼羅とともに授けられたもので、同寺の靈宝として伝えられたが、後に興福寺一乗院房官の高間法眼を介して聖光寺の開山良阿上人に寄贈され、慶長十五年（一六一〇）八月、天和三年（一六八三）七月の修補を経たものとするのである。

聖光寺にはまた、江戸期書写の方の曼荼羅が写された際、に作成されたらしい縁起が残り、そこには「余先師山栄謂此曼陀羅者三国無双之靈宝也 唯恐寺内不広災変不無願願一鋪以遺遐代 而不遂之空亡 今当三十三回遠忌 憶師之言滕写之以遂師之矣 愚謂安之他境遁類滅之災可也

栄誉誌」とあつて、栄誉がその師の追善のためにこの複本を作ったことがわかる。ちなみこの新曼荼羅は曼荼羅下辺書き込みには、「南都聖光寺山蓮社栄誉光因師願写」とあつて、栄誉は（京都ではなく）奈良の聖光寺の僧で、当初はそちらに伝わったものであつたらしい。

この縁起では、

聞説 經數百年而後超昇寺大破之時 南都一条院坊官高天氏修補 感此助成之恩力 附此曼陀羅於高天家矣 中古洛陽聖光寺中興良阿上人 有宿願而每月參窺春日社 寄宿菊岡宰相之宅時ニ演淨土安心起行之要義 高天法眼淳貞亦來問聽 法眼甘心之余掛此曼陀羅於宰相之庭樹 示良阿附未曾有之思 感涙難押 粗説交相聽衆催感或臭異香或見瑞光見聖衆 爾來称影向之松（于今在彼庭） 法眼曰上人者是清海之再來歟 永附之良阿上人 爾來至今留能筆者 觀音利生之地洛陽聖光寺都鄙之結縁周徧乎（毎年六月廿三日自辰至午出張之）

と、高天法眼から良阿に伝えられた経緯がさらに詳しく述べられている。

なお同じ文書によれば、この複本の作成に際しては、「先於是 袋中和尚模写之 聖光寺超誉令洛之画工藤本佐助滕写之 而聞者違本凶処 今江府増上寺觀徹大和尚令神

足及洛之絵所青木七大夫 熟視熟識而後作 合讀而行于世
因茲今令七大夫滕写之者也」とあつて、袋中によつて写されたものと聖光寺にあつたものとを、後にも述べる『智光
清海二曼荼羅合讚』の著者である、鎌倉光明寺の第五十八
代の観徹が見比べ監修する形で関与したことが述べられて
いる。

観徹は、清海曼荼羅の江戸期写本の一つである、茨城の
那珂市瓜連^{うづつ}にある常福寺所蔵本の作成にも関与したことが
知られる。常福寺本は、縦九八・〇cm、横七〇・〇cmの小
振りの作だが、その裏面に、

夫於吾本邦図画浄土聖境者 凡有三相 乃此智光・法
女・清海所感也 嘗常福前住白普秀老 彩画法女変相
以鎮于寺 余当先領彼山務 惜欠余二図 因而今以智
清二曼荼羅奉納之 欲令別郡黎庶 瞻礼之結 浮葉勝
縁也 時国君源公台下仁政恩惠 以布国家政崇仏乘賢
夫人大母公同心 台下共信浮葉由之啓事 以靈図設備
拝瞻 夫和璧者憑成王賞乃称天下宝今也経 至尊之高
覽則可謂妙相之増輝者也

享保十三歳次（一七二八）戊申正月十七日 相州鎌倉
光明寺第五十八世 観徹 （印）

の張り紙があり、観徹が常福寺に法女変相（当麻曼荼羅）
はあるのに、他の智光と清海のそれがないことを惜しんで、

時の將軍徳川吉宗とその夫人の助力を得て作らせたもので
あることがわかる。この常福寺本の清海曼荼羅も、筆写の
時代が下り、また小振りなものであるとはいへ、たいへん
精緻な筆になるもので、観徹の清海曼荼羅に対する熱意が
感じ取れるものである。

さて、室町写とされるいま一つの写本の成覚寺本は、現
在もつとも古い書写と認められるもので、聖光寺本と比較
してみてもその図様にいつそうの古色が認められる。こち
らにも裏面に修理の覚えが添付されていて、伝承を伝えて
いる。

南無阿弥陀仏

導師 弁蓮社良定上人袋中大和尚名号意趣在軸内
今這ノ曼陀羅者、洛陽清水寺ノ觀世音菩薩ノ所作而、
南都長勝寺ノ住僧、沙門清海之感得也。于時長徳二
（丙申）年（九九六）也。今、宝永二（乙酉）（一七
〇五）迄、経タリ七百年ヲ。爾ル二天正年中（一五
七三〜九二）、依彼寺破滅、什宝亦転伝。其頃ヒ有洛
陽福裕禪門。云善西ト。得茲曼陀羅ヲ、仰信甚深。爾
ニ寛永七（庚午）（一六三〇）三月十五夜、蒙塩釜大
明神告夢、同年十月十五日、加シテ一卷ノ縁起ヲ、以
寄附当山 略縁起并告夢ノ具コト、悉以裏ニ書之。然
而隔其間七十六年。故ニ表具裏打共ニ大ク破ス。依之、

裏書或虫食、或破壊、損失。爾ルニ依哉神明 感夢ノ一段、不損滅。故別ニ成一軸、以備後來ノ龜鑑、今新ニ以改再興表具ヲ。故裏書亦如件。
曼茶羅寄進施主京都二条高倉通

寿觀善西信士 永觀妙寿信女

表具師寄進 鈴木依甫 永野弥助

表切寄進 伝光照授信女

再興主立 佐野屋利左衛門

助成 檀那念仏講中

筐二通 鏡屋小右衛門

于時 宝永二(乙酉)(二七〇五)八月六日

奥州仙台十劫山成覚寺十二世 格蓮社外誉良風

つまり寛永七年(一六三〇)三月の塩竈明神の夢告によつて、京都二条高倉通の善西と妙寿(のおそらくは夫婦)によつて寄進され、宝永二年(一七〇五)八月に修補されたものである。

ここである「略縁起并告夢ノ具^{ツブサナル}コト」は、成覚寺に後半部(本文四行と奥書のみ)が残存する「清海曼茶羅成覚寺へ寄進セラレシ縁起」を指すと思われる(卷子に仕立てた冒頭余白に「裏書之切／当寺什宝清海曼陀羅裏書 今宝永二乙酉迄／其間相去^{コト}七十六年 故^ニ或虫食或破損失^ヌ／爾^{ナル}奇哉 明神感夢之一段而已不損 仍以別^ニ成^{コト}一軸^ヲ爾

也」、また末尾余白に「天下和順日月清明／南無阿弥陀仏／風雨以時災厲不起／宝永二乙酉八月六日／十劫山成覚寺十二世 良風〔花押〕」の識語があることで判明する)が、それは、

□□既□仍或夜夢 衣冠正人来示 我是奥州塩釜明神
当国無清海感德曼陀羅 汝作其功寄附仙台之成覚寺
善西催歡喜淚 夢醒則抽丹誠功速畢 併任靈夢告命奉
贈彼寺者也

惟時寛永(庚午)歳三月十五日

施主 京都二条高倉通 寿觀善西信士 永觀妙寿信女
というものである。当寺の京都と東北との交通の交通の盛んなさまを思うべきであろう。

なお成覚寺には、信者に分け与えられたと考えられる清海曼茶羅の縮図と版木が現存している。

縮図は、通常の版本より少し大きい程度の大ききで、紺紙に金色(銀色は用いられない)で印刷され、上部に右書きで「清海曼陀羅縮図」、下部に「仙台成覚寺所藏」、右袖に「天下無二之靈宝」、左袖に「開帳復興紀念分布」の文字が印刷されている。周囲の蓮花の中に本来は書かれるべき十六観の文言は省略されているし、下部中央にある「沙門清海為奉図絵／極楽浄土並両界曼／茶羅唱善尼女等令／續織藕糸功畢納匣／蓮華座現感懷難忘／写取彼様令書外陣

／拝者知之于時長徳／二季丙申十月廿二日」の八行は、「長徳二年清水／ノ観音一夜二描／キテ沙門清海ニ／授ケ玉ヘル者也」と、四行に切り縮められ簡略化されてもいるが、全体の雰囲気は実によく再現されていて、開帳に参集した信者たちにとって清海曼茶羅の靈妙さをしのぶよすがとして有り難がられたに違いない。

同じく成覚寺に保存されている版本をこの摺り物と比べてみると、ほぼ同じ大きなながら上部の文字が「清海曼陀羅」、下部が「仙台成覚寺」とだけあって、「縮図」や「所蔵」の字が見えず、また左右にも何も書かれていないので、摺り物はまた別の版本によって摺られたものであることを知る。

現存の版本は裏面に宝暦十年（一七六〇）の制作年次が刻まれているが、この期には先に用いられていた版本が摩滅するほど多くの縮図清海曼茶羅が摺られ、人々にわけ与えられたのであろう。

成覚寺にはさらに時代が下るが、文化十四年（一八一七）五月の「清海曼陀羅御開帳志納付受帳」と題する文書がある。そこには「一当山行臨ましく／給ひてより 正月十六日 七月十六日 春秋ひがん中日に 内拝開帳致来候え共 年久敷星霜うつり候故 曼陀羅の御徳を知人まれにして御参詣も自然と薄く成 一ノ宮大明神の御神慮にも

おそれあり 依て結縁のため当七月十六日より同廿二日迄 一七日開帳仕候間 御信心の御方様御参詣可被下候」との文言が確認され、正月と春秋の彼岸、さらに盆の季節に清海曼茶羅が開帳され多くの信者に拝まれていたことを知るとすれば民衆的な信仰の広がりという点で、当麻曼茶羅や智光曼茶羅に比して一步を譲ると考えられることもなかったとはいえない清海曼茶羅であるが、仙台の地でこうした受容がなされていたことを銘記しておきたい。

三 清海曼茶羅の「出現」

これまでも指摘されてきたことであるが、清海曼茶羅の第一の疑問は、その存在が古い文献に姿を見せず、建久二年（一一九一）年から翌三年にかけての南都巡礼の記録とされる鎌倉時代の『建久御巡礼記』になつてはじめて姿を見せることである。すなわち、いま藤田経世編『校刊美術史料寺院篇上巻』（一九七二）に翻刻される大東急記念文庫本（旧久原文庫本）の影写本、超昇寺の段に、

本尊ノ極楽ノ変曼陀羅オハシマス、藕^{ハチスノ}絲^{ニテツリマツケ}織^{シモノ}儲^ノラレタリケルニ、イマダカ、レザリケルニ、下縁^{シモノノニアリタル}当^{ミエ}所^ニ、蓮華^{ヒトフサ}一房^{カネテ}、兼ヨリ書^{カキケル}様ニ現ジテ、見ケル事有リ、後ニ絵師ヲ都ノ方^{ミヤコ}尋ケルニ、夢見タル事有トテ、オモヒカケズ進^{ス、ミキタリ}来^{テカケル}書^{ヘリノハチスノ}、其縁^{ヒシト}蓮花^{ニカケ}、斉相応へ

り。絵師書畢^{カキハテデ}之後、カイケツ様ニ失ニケリ、とある文章がそれである。

また、近年大橋直義氏によつて全文の翻刻が紹介された、天理図書館蔵の『大和寺集記』（『巡礼記研究』第一集、二〇〇四・一二）は、氏も言われるように、『校刊美術史料寺院篇上巻』で紹介されている『護国寺本諸寺縁起集』との関係が密接であるが、諸寺縁起集で読み得ずに空白となっている部分をかなりに補つてもくれている。いまこちらに依れば、大東急文庫本『建久御巡礼記』に対応する部分

北有法花三昧堂 有浄土曼荼羅 其下銘云 沙門^清請海
為奉図絵極楽浄土并両界曼荼羅召善女尼令續繖繖糸
功畢納運蓮花坐現 感懷難忘写取彼様令画外像志知之
于時長徳二年（九九六）（景申）十月廿二日（已上銘
文）

口伝云 聖人得絹已封置三衣苔畢 為求仏師京上 還
来開見現其上如以髮攪書之 従上徹下其文甚分明云々
とあり、さらに「超昇寺日記」なるものを引用して、「此
寺平城天皇太子真如親王之御願也」と続けて由来を語る。

大橋氏は、従来『校刊美術史料』の『護国寺本諸寺縁起
集』の組版の仕方から、「超昇寺日記」の範囲がどこから
どこまでなのか、はつきりしなかったのを改め、「超昇寺

条は、まず真如親王伝を引用し（氏の解釈はその最後に
「日記」も含まれるということのようである）、さらに池
の北にある「堂」を清海往生の「アト」として、なんらか
の「清海伝」を引用したあと、本尊・道具などを実見、さ
らに清海曼荼羅をも実見したことに触れたのち、唱導句然
とした文言（末尾の「一度モ此結縁セン人誰一仏浄土ノ身
と生レサラン」を指すのであろう）をもつて、この条を終
えている」と、この文章の構成を解説している。すなわち、
池北堂アリ、清海上人ノ安養ノ業ヲ修シテ浄土ヘマイ
ラセ給ヒシアトナリ

（中略）

此寺ノ池ノ北ナル石ノ本、カタノヤウナル草ノ庵ヲム
スヒテ、夜昼タユマス、ミタノ宝号ヲトナヘテ、極楽
ヲネカフコトラコトラセタマワサリケリ、此本尊道具
念珠并仏舍利、イマニ伝テオハシマス、一生ヲコトラ
スツトメテ、遂極楽^ツ迎得給ケリ、彼往生ノ者ノアトラ
礼タテマツルニ、聖人フタ、ヒアヒタテマツルコ、チ
ナンスルカノ始給ヘル念仏今ニタエス、八月六日ヨリ
シテ七日七夜也、彼念仏^ハ化人必タ来ラセ給ヒテ、
コ、カシコノ南都人々結縁^ハマイラヌ人ナシ、聖人在生
之時、七日七夜タヨマス、弥陀ノ念仏ヲツトメサセタ
マヒケルニ、香呂ノ煙^ハツキテヲナシク行道セサセ給ケ

ル白檀ノ三寸ノ阿弥陀仏、今ニヲハシマス、アハレニカタシケナシ、又彼御本尊ノ極樂ノ反ノ曼陀羅オハシマス、先ミソキヌヲ蓮ノイトシテオリマウケテ、絵師ヲエスシテヲカセタマヒケルニ、蓮花ノ開タル一房花ノ面現シタリ、後ニ京ヨリ夢ヲミタル事アリトテ、曼陀羅カ、ウトテ一人ノヒト来テカキケルカ、下ノヘリニ彼兼テ現タル蓮花、マクハリヲスルニタカハスヒシトアヘリ、アサマシク目出キ事也、絵師カキケツヤウニイツチモシラレスウセニケリ、

とある部分は、筆者の行動と聞書きを記したものとするとある。基本的に従うべきであろう。そうして氏は、謄写を表すらしい「マクハリ」などの擁護の「具体性の高さ」から「口頭による浄土曼荼羅の解説があつたことを想像させる」(『建久御巡礼記』と浄土三曼荼羅説話)説話・伝承第十四号、二〇〇六・三)と述べている。

清海について他の文献に記述がないわけではない。しかし同じ鎌倉時代の承久四年(一二二二)成立かという、九条家出身の慶政著の『閑居友』にも清海が香煙の内に化仏を得たということは載せられても、曼荼羅についての記述はまったく見られない。

昔、奈良の京、超証寺に、清海といふ人おはしけり。もとは興福寺の僧にて、学問をぞむねとたしなみける。

かゝるに、この国のならひ、今も昔もうたてきは、東大寺、興福寺二寺の僧ども中あしき事ありて、東大寺へ軍をとゝのへて寄せけり。この清海の君も、弓、胡籙^{こりふ}身に添へて行きけり。さるほどに、道にて時をつくりて軍喚^{いさな}きしけるに、身の毛立ちて、「こは何としつる身のありさまぞ。恩愛の家を出で、仏の道に入る身は、人の苦しみを救け、仏の御法の廃^{すた}れんを悲しみ嘆くべきに、今、形は僧の形にて、たちまちに堂、塔、僧房を焼き、仏像、経巻を損ひ、僧を殺さむとて行く事、こは何のわざならん」と、悲しくあぢきなし。

「今、見つけられて、いかなになるとても、いかゞせん。しかし、早くこゝより行き別れなん」と思^{おも}て、やをら這ひ隠れにけり。

さて、真如親王の跡、超証寺といふ所に籠り居て、ひそかに法花の四種三昧をぞ行なひける。観念功積りて、香の煙の化仏の現はれ給けるを、末の代の人に縁結ばせんとて、ひとつ取りとゞめ給ひたりけり。三寸ばかりの仏にてぞおはしましける。すべてこの人、観念成就して、居給ひたりける廻^{めぐ}り一里を浄土になし給けるなり。

このことは同じく清海を扱う『沙石集』においても同様である。

上古の大師先徳、多くは田舎の人也。南都の超勝寺の本願、淨海上人は、東大寺法師也。田舎の武士のすゑとかや。京の人とも云へり、身の丈七尺ばかりにて、器量人にすぐれたり。興福寺と合戦すべきにて、すでに甲冑を帶して軍の庭に出で、つくぐ思ひ廻らすに、抑寺に住する本意仏法修行のためなり。合戦をするほどならば、俗の形にてこそあらめ、よしなしと思返して、やがて超勝寺に引籠りて、一すぢに修行する事、勇猛精進にして、香の煙の中に、生身の弥陀の像現じ給ふ。やがてとりとどめ奉れりともいひ、又うつし奉れりともいへり。かの像今にいます。御丈五六寸ばかりの像なり。御形嵯峨の釈迦に似給へり。先年之を拝す。発心修行誠有りし。

引用は、いま貞享三年（一六八六）版本を底本とする岩波文庫本によつたが、梵舜本（岩波大系底本）や米沢興讓館旧蔵本（小学館新編全集底本）には当該説話はなく、後に（おそらく無住自身によつて）付加されたと考えられる部分である。

無住は、清海を東大寺僧とするなどの誤りを犯しているが、「先年之を拝す」と自ら超昇寺を訪れてもいるらしい。その際は彼は曼荼羅は見なかったようである。

『元亨釈書』が「釈清海。身長七尺余。少好武。材力

過人。後棄弓矢居興福寺。一時徒有戦争。海已撰甲。又自思言。我昔從事於此。中之入仏家。今我又復先業。豈我素乎。便入超勝寺精勤苦練。一日香煙之中弥陀像現。其長五六寸。海不耐歡喜。便取像奉安。今尚在焉」と、曼荼羅に触れないのは、あるいは僧伝の限られた範囲での叙述を心がけたかと考えられないわけではないが、それにしても不自然の感は否めない。やはり曼荼羅についてはほとんど知られていなかったというのが実情なのであろう。

『閑居友』が「この清海ノ君ノ事、拾遺往生伝に載せられて待めれど、この事は見えざれば、記し載せ待ぬる」というように、清海の名が初めて見いだせるのは、三善為康が天永二年（一一一一）ごろにまとめた『拾遺往生伝』の上巻一二話だが、もちろんそこでも、「沙門永延の末（九八九）に、初めてこの砌において、法華三昧を修せり。正暦の初（九九〇）、自他を勧進して、七日念仏を修せり。いはゆる超証寺の大念仏これなり」（原漢文、日本思想大系『往生伝 法華験記』（一九七四）の読み下しによる）と「法華三昧」の記事だけがあつて、その後には河内の勝空上人との交流についての記載だけが記されていた。こうした作品中に曼荼羅の存在が一切語られていないことは、やはり重く受けとめておかねばならない。はじめて曼荼羅について語られる『建久御巡礼記』の記

載自体にしても、善本とされる大東急記念文庫本の記載では、靈夢による蓮の花弁の示現に焦点が当てられ（それは伝承の中で後代には忘れ去られていく要素である）、京上の途上に遇う女性も清水観音との関係などはまだ出てこない。天理図書館本『大和寺集記』の記載も含めて、まだ伝承が固まっていく途上にあり、揺れている様子が伺える。

現存する成覚寺本や聖光寺本の修理銘文に残されるのとは一致する伝承が現れるのは、時代も室町期に下る、西誉聖聡（一三六六一四四〇）の『当麻曼陀羅疏』（巻第五縁起五、『浄土宗全書』巻一三）での浄土三曼荼羅の第三としての「超昇寺曼陀羅」解説中においてである。

聖聡はそこで、師の了誉聖岡の草した超昇寺法華三昧の縁起記事に続けて、「于茲上人思食様我極楽欣未極楽体相見奉然彼当麻寺曼陀羅三國無双曼陀羅此写拝奉思給此時未新曼陀羅出来前聊写大事也」と新たに曼荼羅の製作について語るのである。そうして木幡山での老翁との出会い（聖聡は「或説ニハ云二十七八ノ女人一極楽坊長老ノ説ナリ爾ルニ老翁ト云事ハ彼寺ノ寺僧ノ説也」と異伝にも注意を払い、また「彼山中其遺跡于今有也」とその所を訪ねてもいる）を記し、それが清水観音の化身であることを述べている。

またこの文章によれば、聖聡が清海曼荼羅について知つ

たのは、応永三四年（一四二七）の十月十四日、智光曼荼羅を拝むために元興寺を訪れた際、たまたま元興寺の長老に存在を聞いたのだという。そうしてさつそくその翌日には、聖聡は超昇寺を訪ねている。

同十五日、聽南都西京超昇寺參念仏堂拜見音聞念仏堂拜事喜サヨト歎喜之泪流候然念仏堂宮殿戸不開不拜化仏況乎曼陀羅事七月十五日不出給事拜見雖有望中々思不依化仏計拜奉坊中望所成候ケレハ其日鑑取開宮殿戸拜仏三寸化仏座像綵色仏也付之仏境界実哉如来飛来給化仏何処誰人是彩色奉本来極楽浄土此彩色任コソ飛来給弥貴覺感涙難押候

次付彼寺僧曼陀羅拜見之由申候本曼陀羅聊爾不可叶新曼陀羅写後門掛候網地紺地偏泥計書候更沈金香箱ナントノ紋候是変相二階宮殿中尊弥陀計在候総体似当麻曼陀羅候仏菩薩数自当麻寺曼陀羅者少見候四方縁大蓮花各四方而蓮花二宛書候曼陀羅宮殿扉左方真如親王御影書右方清海上人御影候也

次猶不飽足本曼陀羅拜事望候彼僧感我等深志取出見候能能拜見寸尺日記還候更不違新曼陀羅候也聽兩界拜候書様同様紺地少薄泥計三

鋪書候^{テシ} 希代不思議^シ靈像也

ようやくにして本曼茶羅を拝むことができた聖聡だったが、「更^ニ不^レ違^ニ新曼陀羅^キ候^テ」といい、両界曼茶羅ともども「紺地^キ少薄泥計^ニ三鋪書候^テ」とあったというから、現在の清海曼茶羅と一致するものと考えてよいだろう。先に「新曼茶羅」について、「四方^ノ縁^ノ大蓮花各四方^ニ而^ニ蓮花^ヲ二宛書候^テ」と書いているのは、四方に金銀で十六の花弁を描く形と相違するかのようだが、この時点ですでに銀泥に銀焼けが生じ、金泥で描かれた八弁だけが見えたのであろう（しかしそれに続く「宮殿扉^{ハノ}左方^ニ真如親王^{ハノ}御影書^ヲ右方^ニ清海上人御影候^テ也」の部分は、現在の曼茶羅にはそうした絵柄が見られず、あるいは元興寺の板絵智光曼茶羅の智光・頼光像との混同など、何らかの誤解なのか、よくわからない）。

この後江戸期に入って、清海曼茶羅は、袋中（一五四四―一六三九）によって再発見され（『浄土第三漫茶羅略記』一六二五著、一六四八刊）、先に京都聖光寺の江戸期写本や茨城常福寺本などで関与が見られた鎌倉の観徹（?―一七三一、『智光清海二曼茶羅合讚』正徳二年（一七一二）刊）、同じく浄土宗僧であった伊勢の大順（一七一―一七九、『智光清海曼茶羅略讚』天明二年（一七八二）序）らによって図像解釈が進められていくが、その分析は他日を

期したい。

大順の著作の影響は特に大きかったようで、名古屋の真言宗僧である妙龍（諦忍一七〇五―一七八六、尾張興正寺第五代）による『智光清海二曼陀羅合讚講述』（天保一年（一八四〇）写本、大谷大学蔵、寛保三年（一七四三）成立）といった書物も著された。同著は、『智光清海二曼茶羅合讚』に載る要注解語（清海曼茶羅の場合、「昼夜一却」「思齊」など四十二項目）に注釈を付したものである。

四 紺地金銀泥という方法

最後に清海曼茶羅の最大の特徴といってよい、紺地金銀泥という特徴について考えておこう。先にも述べたように「当麻曼茶羅」と「智光曼茶羅」はいずれも極彩色を用いた浄土の表現となっており、浄土三曼茶羅のうちで清海曼茶羅だけが独特の形態を持っているのである。

金銀泥の曼茶羅ということでもまず想起されるのは、天長年間（八二四―八三三）に淳和天皇の発願を受け、空海によって新たに作成されたという、神護寺蔵の高雄曼茶羅であろう。高雄曼茶羅は、胎蔵界が縦四四・四cm、横四〇・三cm、金剛界が縦四一・〇cm、横三六・五cmという巨大な両界曼茶羅で、赤紫綾地に金銀泥で描いている。「両界曼茶羅は彩色されるのが原則で、（空海による唐か

らの）請来本も彩色本であったが、高雄本はこれと違って金銀泥で描かれており、両界図としては特殊なもの」（日本の仏画・第一期 第七巻『国宝高雄曼荼羅（神護寺）』一九七六、解説柳澤孝氏）である。なお、高雄曼荼羅については、東京国立文化財研究所美術部編の『高雄曼荼羅の研究』（一九六七）が公刊されており、柳澤氏と秋山光和氏の連名での「形状と材質」「様式と攻法」「絵画史的展望」などの基本的な研究成果がまとめられている。

真鍋俊照氏は、「極彩色から金泥・銀泥二色に変えられた根拠は、高雄曼荼羅が灌頂用具としての新たなタイプの両界曼荼羅として機能させたい意図がはたらいた為」と推定し、「堂内内陣の真暗闇の中で、燈明の数灯の光りだけで、高雄曼荼羅の大画面を照し出すことになる。その場合は、画絹の下地が赤みがかった小豆色のうすい感じ（赤紫）の綾地である。……これが紺地ではなく赤紫色であるから、逆にあたたかみのある色感が出されることになる。闇の内陣空間において金・銀が湧出し、尊容の一尊一尊が空中に浮かんで見える、という視覚の仕掛け、これこそ五彩色から金・銀二色に移しかえた空海の尊像表現のたくみな演出とみなすことができよう」とされた（「空海と高雄曼荼羅」四国大学附属言語文化研究所『言語文化』五号、二〇〇七・一二）。そうして氏は、空海がそのような「仕

掛け」を思い浮かべるにあたって参考にしたものとして、ギメ東洋美術館が所蔵するペリオコレクションのうちの五 points の「紅地絹本に優美な銀泥描き」の幡の存在を挙げられている（「敦煌仏画の彩色法」印度学仏教学研究五五卷一號、二〇〇六・一二）。堂内の荘嚴具として、紅地の幡から「花喰鳥」や「迦陵頻伽」や「双鳥唐草文」などが浮かびあがって見えるという「仕掛け」である。

先にも引いた藤澤隆子氏の「清海曼荼羅―八世紀浄土図の一つとして」（『日本浄土曼荼羅の研究』）は、清海曼荼羅の図像を分析して、それを八世紀半ば中国での成立と結論づけたもののだが、その際の外部からの推定根拠の一つとして氏が挙げられたのが鑑真和尚請来の阿弥陀浄土変相一鋪の存在であった（正倉院文書一三）。そこでは「大唐和尚進内紫帳金墨像」の注記が施されているが、これもまた「紫」地である。

真鍋氏が先の論文でいうように、「色彩の明暗を測定する値の明度の基準から判断するならば、モノクロームに近い濃度のあるブルー（青）系の方が闇の中の銀色発光効果は、高い」（「空海と高雄曼荼羅」）はずで、「あたたかみのある色感」が高雄曼荼羅の特色だとすれば、清海曼荼羅は、むしろそれとは逆に冷冽で澄みきった浄土の表現こそをその特色とするのであろう。

ここで想起されるのが、建保七年（一二一九）成立の跋文を持つ『続古事談』巻第四―二四が伝える小さなエピソードである。すなわち、源融の旧邸河原院で、「五時講」が行われた際、「聴聞には、山には恵心・檀那の僧都より始め、奈良には小嶋真興僧都・清海上人已下、七大寺こぞりてあつまる」という。ここで南都を代表する高僧として、清海と小嶋寺の真興とが番わされて登場していることは興味深い（ちなみに享保三年（二七一八）刊の『諸嗣宗脉記』には、清海を真興の弟子十一人の一人に数えているが、平安期の史料では、真興の名は『御堂関白記』に見えるが、清海の名はどの史料にも見ることができない。真興と清海を番いで理解することは、『続古事談』成立時での評価なのであろう）。

真興が長保年間（九九九―一〇〇四）に一条天皇から下賜されたという伝承を持ち、現に子嶋寺に伝わる「子島曼茶羅」こそ、冷冽で澄みきった浄土を書き表した両界曼茶羅にほかならないからである。子島曼茶羅もまた、高雄曼茶羅にこそ及ばないものの、胎蔵界が縦三五・一・五cm、横三〇・六・二cm、金剛界が縦三五・二・六cm、横二九・八・〇cmという巨大な法量を持つ両界曼茶羅である。

四カ年の歳月をかけて文化庁の模写模造事業の一環として取り組まれ、二〇〇三年春に完成した復原模写子島曼茶

羅二鋪が、二〇〇六年夏に奈良国立博物館において公開された。「今回の復原模写制作に際しては、綾裂や金銀泥などの素材はもちろんのこと、画面の表面加工など制作技術に至るまで、原本に忠実な再現が試みられた」（同展図録、二〇〇六）が、展覧では、展示期間を前後二期に分けて、胎蔵界と金剛界のそれぞれ原本と復原模写本とを比較鑑賞できるような配慮がなされた。その結果は、銀焼けのためくすんでほとんど見えなかった銀泥が鮮やかによりみがえり、強烈な印象が残った。

図録では、子島曼茶羅自体については、「製作年代は、十世紀から十一世紀にかかる平安時代中期に置くのが妥当」と考えられ、一条天皇が真興に『子島曼茶羅』を下賜したと伝えられる時期とも矛盾しない」としつつ、「こうした綾裂に金泥もしくは金銀泥で描かれる両界曼茶羅としては、『子島曼茶羅』以外に『高雄曼茶羅』および山形・上杉神社本という平安時代に遡る二例がわずかに現存するのみで、文献上も久安三年（一一四七）三月の藤原忠実七十賀（『台記別記』）や仁平二年（一一五二）の鳥羽院五十賀（『兵範記』）に際して製作された金泥両界曼茶羅が知られる程度という、極めて珍しいものである。高価な材料を用いる綾地金銀泥曼茶羅の製作は、貴顕の発願による特別の場合に限られていたのだろう。ただし鎌倉時代に入ると、

綾裂ではなく紺色に染めた絹地に金泥のみで描かれる両界曼荼羅がしばしば製作されたようで、奈良・西大寺本、米國・個人蔵本、米國・フリア美術館本などが現存している」と、その流れを概括し、加須屋誠氏が「子島曼荼羅試論」（京都大学文学部美学美術史学研究紀要第九号、一九八八）で指摘した。貞慶筆の『壺阪寺古老伝』（建暦元年、一二一一）での、観覚寺四季曼荼供記事などによって、鎌倉時代の壺阪寺伝来の両界曼荼羅（紺地金銀泥）の例を挙げて、「この曼荼羅が製作された時期は、……壺阪寺の僧侶が観覚寺の四季曼荼羅供を通じて『子島曼荼羅』の供養に直接に関わっていた可能性が高く、子嶋寺周辺で『子島曼荼羅』と同様の紺地金銀泥曼荼羅が一定の流布をみた可能性がある」と興味深い指摘をしている。

また私たちは天治三年（一一二六）に平泉の中尊寺に奉納された大量の紺紙金銀字一切経（現在高野山に所蔵されている国宝指定のもので四千二百九十六巻を数える）の見返し絵に、多くの仏と山水とが金泥銀泥を使って鮮やかに描かれているのを知っている。

こうしてみると、清海曼荼羅の原型がどのようなものであり、どこに典拠をもっていたかはさらなる美術史専門家の教示にまたなければならぬにせよ、平安期において清海の姿は登場しながら、いまだその姿のまったく見えな

った清海曼荼羅が『建久御巡礼記』以降に現れてくるのも、このような一連の流れによってであろうことが推定されるのである。清海が後には清水観音に集約されていく化人によって描いてもらったのが、清海曼荼羅一幅ではなく、いずれの伝承によっても両界曼荼羅と併せて三幅であったことは、それが子島曼荼羅に影響を受けた紺地金銀泥の両界曼荼羅の拡まりを受けての「登場」であったことを示しているといつてよいのではなからうか。

付記一 子島曼荼羅展図録では、ある種の波長の近赤外線撮影によって銀焼けして見えない部分の描線がはっきりと写し込まれるとして、「……デジタルカメラで原本の一部について近赤外線撮影を行ったところ、銀焼け部分が明瞭に写ることが判明したのである。そこで改めて全画面にわたって近赤外線による写真撮影を実施し、それまで不明瞭だった銀泥描き部分の大半について忠実に復原することが可能となった。……銀焼けした部分が赤外線写真に写る科学的根拠については、残念ながら不明な部分が多い。しかし実験により、黒化していない銀泥を近赤外線で撮影してもほとんど写らないのに対し、意図的に銀焼けさせたものを撮影すると明瞭な映像を得ることができた」と報告している。この記載を知っていたので、成覚寺本の清海曼荼羅撮影にあたっては何種類かの波長の撮影を試みたが、残念ながら鮮やかな描線を得ることはできなかった。

付記二 浄土宗新聞四〇三号（二〇〇〇・九・一）には、千葉県富津市の安国寺に信徒の方が新たに清海曼荼羅（縦一八三cm、

横一四五cm)を描いて奉納されたとの記事がある。銀焼けを防ぐため、金泥と一部銀泥、多くをプラチナ泥を用いたというが、未見である。掲載のカラー図版には、鮮やかな描線が示されている。当初の清海曼茶羅のあり様を伺うよい資料となっている。

付記三 今夏、ここに報告したような内容を京都の聖光寺御本堂でお話する機会があり、その際には御住職の小林称光様の御厚意によって、同寺が所蔵される江戸期の清海曼茶羅が本堂に掛けられた。御報告を受けての後、聴衆の方から、暗闇の中でどれくらい金銀泥の描線が浮かびあがって見えるかと御質問があり、電灯をいっさい消して、一本の蠟燭の明かりだけで、皆で拝観するというありがたいひとときを持った。江戸期の写本でも銀泥はかなり薄れているけれども、それでも金泥を主として暗闇の中から浄土のありさまが揺らぎながら立体的にさえ見えて浮かびあがるさまにはまことにすばらしいものがあつた。